# PISA IN FOCUS 29

education policy education policy education policy education policy education policy education policy education policy

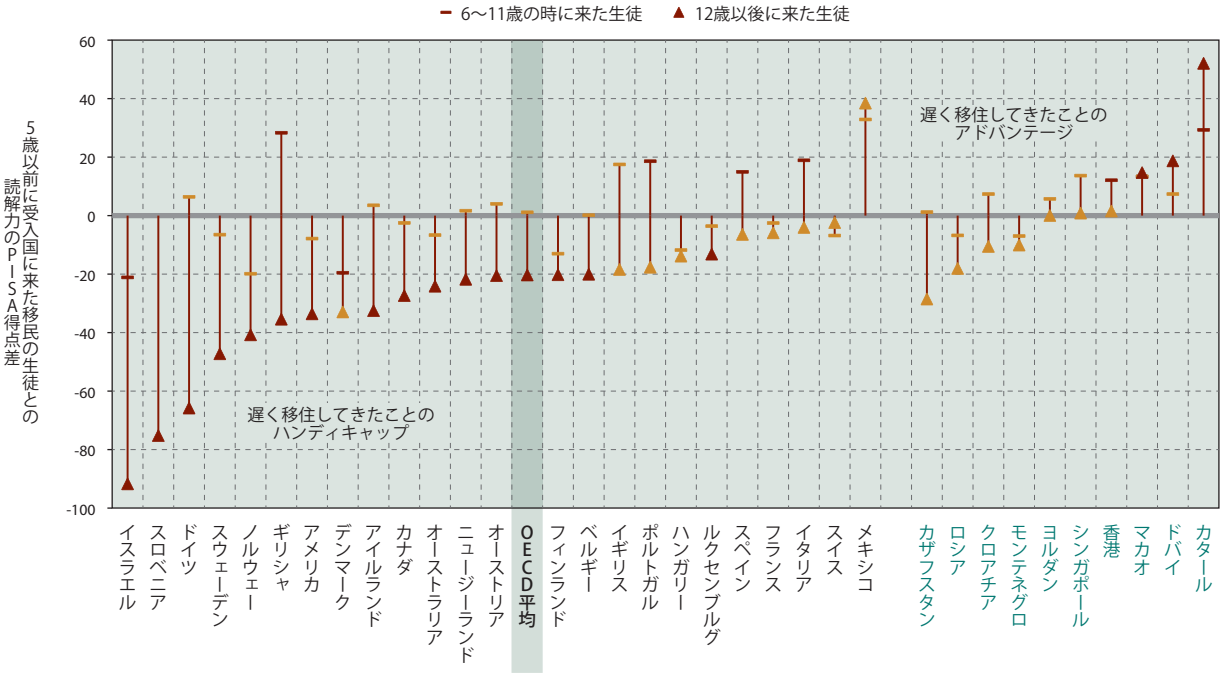
## 移民の生徒たちの読解力は受入れ国で過ごした年月と関係があるのだろうか。

- ほとんどの国で、移住したばかりの15歳の移民の生徒たちは、5歳未満で受入れ国にやってきた移民の生徒たちよりも読解力の成績が振るわない。
- 家庭内言語が受入れ国の指導言語と異なる後進国から移住した生徒たちは、読解力における「遅く移住してきたこと」のハンディキャップを特に被りやすい。
- 開発水準が同様で、受入れ国と同じ言語の国から来た移民の生徒たちは、「遅く移住してきたこと」によるハンディキャップを一切被らない。

家族が新しい国へ移住するとき、両親はより高い生活水準とより輝かしい未来を子供たちに与えたいと願っていることが多い。しかし移民の子供たちは、学校でよい成績を収めるために多くの障害を克服しなければならない。中には、指導言語に慣れていないことや不安定な生活条件によって、受入れ国で過ごす初めの数年間に特に緊張を強いられる経験をする子供たちもいる。

特にオーストラリア、ベルギー、カナダ、ドイツ、ニュージーランド及びスイスといった国では、過去十年間で移民の背景のある生徒たちと移民でない生徒たちとの間の成績格差を縮めることに成功している。しかし、ほとんどの国で、15歳の移民の生徒たちは読解力の成績においてその国で生まれ育った生徒たちに後れを取っており、移住したばかりの移民の生徒たちの成績は更に振るわなかった。

移民の生徒の「遅く移住してきたこと」の価値




注：「早く移住」「遅く移住」のカテゴリーに少なくとも40人の移民の生徒がいる国・地域のみを対象としている。統計学的に有意な差を濃い色で示している。PISA得点の差は、PISA調査年、生徒の性別、在籍学年をコントロール変数として推定している。

「早く移住」と「遅く移住」の得点差が大きい順に、国を並べている。

出典：OECD (2012), *Untapped Skills: Realising the Potential of Immigrant Students*, Figure 4.1, OECD Publishing; and Table B4.3, based on analysis by Heath and Kilpi-Jakonen (2012) on PISA pooled data 2003, 2006, 2009.

## その国に来たばかりの15歳の子供たちは、幼い頃に移住した移民以上にクラスメートに後れを取る。

PISA調査データの分析は、移民の子供たちの間で、5歳になる前に移住した子供たちと、移住したときに6〜11歳だった子供たちの読解力において、目立った違いはないことを示している。これに対し、ほとんどのOECD加盟国では、移住したときに12歳以上、受入れ国で過ごしたのは長くても４年の移民の生徒たちは、もっと幼い頃に移住した移民よりも、読解力において同じ学年の生徒たちに更に後れを取っている。留年率が高い国々では、移住したときの年齢が高かった移民の生徒たちのハンディキャップが幾らか小さいことによって、こうした生徒たちが1回又は数回留年する可能性が高いという事実が隠されている場合がある。

移民の生徒たちにとってのこの「遅く移住してきたことのハンディキャップ」の重大さは、国や地域によって著しく異なる。最も重大なハンディキャップが見られるのは、大きい方からイスラエル、スロベニア及びドイツであり、一方、カタール、ドバイ及びマカオでは、移住してから日の浅い移民たちが、古くからの移民たちよりもよい成績となる傾向がある。

## 遅く移住してきたことのハンディキャップの重大さは、出身国と受入れ国の組合せによって異なる。

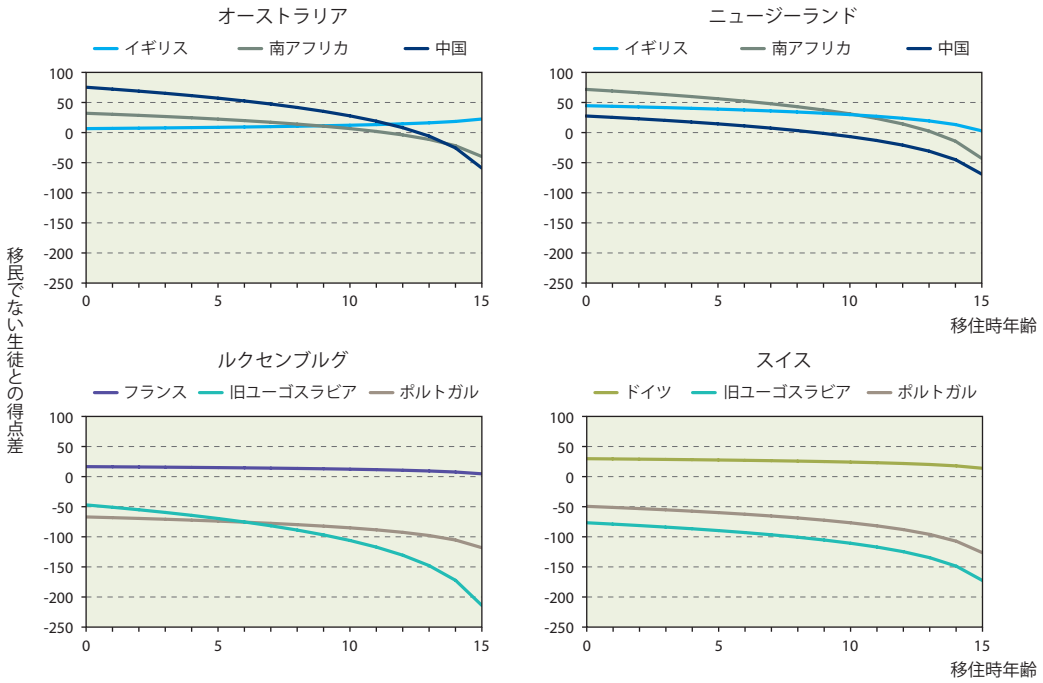
国や地域の間の遅く移住してきたことのハンディキャップの差は、移民人口の構成を反映する。例えば、オーストラリアで大きな割合を占めるイギリスからの移民は、移民でないオーストラリア人と同じ言語を初めから話している。その結果、オーストラリアの移民の遅く移住してきたことのハンディキャップの平均は、例えば、外国生まれの生徒の最大グループが旧ソ連、旧ユーゴスラビア及びトルコ出身であるドイツよりも小さい。

15歳の移民の生徒たちは読解力の成績を考慮するとき、**移住時の年齢と滞在期間の長さは表裏一体である。**移住したときに5歳以下だった生徒たちは、受入れ国で読み書きを学んでおり、家族は受入れ国で10年以上を過ごしている。これに対し、移住した時点で既に前期中等教育学校の年齢だった生徒たちは、移住の前に別の学校システムで数年間を過ごしている。こうした生徒たちは、15歳でも受入れ国にまだ慣れていない。

移住して日の浅い移民にとって、新しい国の言語や制度に不慣れであることは、不確かな生活条件と併せ、読解力の成績が振るわない結果となり得る。しかし、こうした要因は時間とともに改善する傾向がある。一方で、移住時の年齢は、読解力に独自の影響を及ぼす。第二（又は第三）言語の学習は子供の年齢が上がるにつれて難しくなっていき、学校のカリキュラムには、生徒たちが初等から前期中等教育学校へと進むにつれて更に多くの競争的要求が課される傾向がある。残念ながら、移住時の年齢の差が滞在期間の長さの差に相当するのであれば、生徒の移住時の年齢が読解力の成績に与える影響と、生徒が受入れ国にどれほど長くいるかによる影響をPISA調査で区別することは不可能である。

移民の生徒の移住が遅いほど、言葉の壁が高くなる。

PISAの読解力の得点と、いくつかの受入れ国における出身国ごとの移住時年齢との関係




注：PISA得点の差は、PISA調査年、性別、在籍学年をコントロール変数として推定している。

出典：OECD (2012), *Untapped Skills: Realising the Potential of Immigrant Students*, OECD Publishing, Figure 4.3, based on analysis of PISA pooled data 2003, 2006, 2009 by Heath and Kilpi-Jakonen (2012). Only immigrant groups with more than 100 observations are shown.

一部の国々における主な移民グループについて移住時の年齢のプロファイルを調べると、言葉の壁の重要性が確認される。例えば、オーストラリアとニュージーランドでは、イギリスから両国に移住する生徒は遅く移住してきたことによるハンディキャップを被らない。これに対し、中国で生まれながらオーストラリア又はニュージーランドに移住した子供たちは、遅く移住してきたことによるハンディキャップを著しく被る。同じパターンはヨーロッパでも見られる。ルクセンブルグで、フランス人の子供たちは遅く移住してきたことによるハンディキャップを被らない。また、移住時の年齢は、スイスに移住したドイツ人の生徒たちの間で読解力の成績に何の違いも生じさせないと思われる。これに対し、旧ユーゴスラビア又はポルトガルから数年間以内にスイス又はルクセンブルグにやってきた15歳の生徒たちは、同じ国出身ではあるが受入れ国でずっと学校時代を過ごした移民の生徒たちよりも、読解力がはるかに劣る。

しかし、言語のみがこの問題に関係する唯一の要因ということではないかもしれない。出身国と受入れ国との教育水準や生活水準における違いも、関連性があるかもしれない。全体として、PISA調査データの分析から、家庭内言語が受入れ国の指導言語と異なる後進国から前期中等教育学校の年齢で移住した場合は特に、生徒たちが遅く移住してきたことによるハンディキャップを被るリスクがあると分かる。こうした生徒たちは、すばやく言語スキルを身に付け、同級生たちが達成している更に高い到達レベルに追いつき、その間、新しい学校や社会環境に順応する困難に対処していかなければならない。

**結論：多くの国々で、15歳の頃に行うその後の教育についての決定が、後に生徒の雇用に対する見通しを形成する。言語スキルに的を絞った援助と能力別の編成を延期する柔軟なクラス編成によって、遅く移住してきたことが移民の生徒たちに与えられる就業機会に及ぼす悪影響を軽減できる。遅く移住してきたことが家族呼び寄せを遅らせる移民政策の結果である場合、そのような政策に意図される利点と救済援助のコストを慎重に比較考量するべきである。**

本稿に関するお問合せ先
担当：Francesco Avvisati *(Francesco.Avvisati@oecd.org)*

出典：OECD (2012), *Untapped Skills: Realising the Potential of Immigrant Students*, OECD Publishing and the full set of related tables;
Heath, A. and E. Kilpi-Jakonen (2012), "Immigrant Children's Age at Arrival and Assessment Results", *OECD Education Working Papers*, No. 75, OECD Publishing;
PISA in Focus n°11, *How are school systems adapting to increasing numbers of immigrant students?*

参考サイト
*www.pisa.oecd.org*
*www.oecd.org/pisa/infocus*

次回テーマ：
「学習方略によって恵まれた生徒と恵まれない生徒の成績格差を埋めることができるか」

本稿の翻訳は、日本のPISAナショナルセンターが担当しました。